

目次:

- 事務局よりお知らせ
- バン格拉ディッシュからの便り
- MUTTSUNN通信
- 中村まり子さん寄稿
- 児嶋きよみさん寄稿
- ハバネロメルマガ会員募集
- 会員様の宣伝コーナー開設
- ハバネロ質問コーナー開設
- 篠ファームからの情報
- 奈佐さんのメキシコのお話



事務局からのお知らせ

日中は気温も上がり、初夏を思い出させる容器ですが、まだまだ朝晩は冷え込みが続いておりますが、皆様におかれましては如何お過ごしでしょうか。

ハバネロはこの陽気でどんどん成長し、一般的に苗半作と言いますが、今年は7割方、収穫見込みが立つのではないかと思います。よく出来てきております。

今年は12,000本定植いたしますので、上手くいけば300万個の果実を収穫できるのではないかと願っております。





2013,5,8 撮影 出番を待つハバネロ苗

Bangladeshからの便り



ダッカ市内上空から



村の子供とツーショット

Bangladeshの首都ダッカでビル崩壊事故が起き、5月6日現在で死者は637人に上りました。ビルが崩壊した当時は5000人が働いており、約1000人が依然行方不明となっています。これにより、多数の犠牲者が出たことに怒った住民数万人が縫製工場を襲撃したり、路上の車両を破壊したりし、暴徒化しています。

その他、選挙が近くなると行われる野党のストライキ（今年末に選挙を予定）、イスラム教を中傷したものに対する極刑の導入を求めるイスラム信者のストライキなどがあり、毎週Bangladesh全土もしくはダッカを封鎖しています。

5月号

普段は温厚なバングラデシュ人も、暴徒化するとかなり危険になり、外出もままなりません。ジョロキアの実を栽培地から加工工場に運ぶこともできず、生産を中断せざるを得ない日もあります。

いろいろと障害がありながらも、なんとか5期目の加工に取り掛かっています。今年の加工品は特に高品質に出来上がっていますので、ぜひ皆様ご賞味ください。

Ryo Takeuchi

MUTTSUNN通信

ペルーで2009年に世界遺産に登録されたカラル遺跡をご存じでしょうか。この遺跡はエジプト文明とほぼ同時期でアメリカ大陸最古の都市といわれています。この遺跡の素敵なのは、ペリカンやコンドルの骨で作られたフルートが発見されていて、何の用途で使われていたかまだ解明されていない半地下の円形広場の遺跡があるところです。何が素敵かというと、そこは音楽鑑賞をする広場だったという説があることです。この説が本当ならこれまでに発見された遺跡の中で世界最古の音楽鑑賞広場となるそうですが、それも納得。

なぜならここでは人が集まるところに音楽があり、音楽があるところには踊りがあるからです。結婚式に誕生日、クリスマスと何かにつけて人が集まればサルサやメレンゲを踊り始めるのですが、忘れてならないのは数えきれないほど存在する民族舞踊について。どの民族舞踊にもその民族、地域が歩んできた歴史が色濃く映しだされていて魅力的。例えばペルー海岸部の代表格マリネーラの伴奏は西洋楽器で奏でられ、衣装は先住民の刺繍と、西洋のドレスの融合が華やかなスペイン文化の影響を存分に受けたものです。真っ白なハンカチを片手に裸足で踏む激しいステップが特徴なのですが、その由来が少し変わっていて、卵を産んだ雌鶏が卵を孵化させる間、雄鶏が他の雌鶏のところへ行ってしまうように気を引く仕草からきているのだとか。ですから、触れたくても触れられないというのがこのダンスの鍵で、男女は激しいステップを踏みながら近づいては離れてを繰り返し、踊りの要所でキス寸前まで顔を近づけてポーズを決めるので、見ている方がドキドキしてしまいます。

また、色鮮やかな刺繍を施した衣装からこれこそアンデスと思わせる山岳地方クスコの民族舞踊ワイノは男女がそれぞれ2つのグループに分かれて踊るのですが、これは2つの村が競いあっているという設定。ですから踊りながら村対抗のゲームをしたり、同性同士で喧嘩して見せたり、踊りの場そのものが村を超えた男女の出会いの場。ですから女性は腰を振り、肩を揺らせ、男性は腰を落として異性の気を引くように踊ります。

さて、植民地時代、ペルーに影響をあたえたのはスペインだけではなく。彼らがアフリカから連れてきた奴隷、アフリカのリズムがペルーの一部となっていたその流れはアフロアメリカと呼ばれる彼らの基軸そのもの。軽快なリズムに乗せて体を波打つように揺らせ、男女が密着する踊りは生なましく、生と性ふたつの「せい」の喜びを見せつけられているよう。

これらの民族舞踊が披露されるのは、村の至る所で開催されるカーニバルなどの会場でお祭りを盛り上げる大事なエッセンス。きっと古代のペルー人も音楽と踊りが大好きで、何かしら理由をつけては広場に集まり夜な夜な踊り明かしていたことでしょう・・・



mutsum

中村まり子さん寄稿

わが家のいつものメニュー+チリ ~めちゃくちゃ美味しい干しエビのスープ~

今月ご紹介したいわが家のとっておきのメニューは、お口の肥えたお客様もびっくり、とっても美味しい干しエビのスープです。

もともと主人から伝え聞いたメキシコのソパデカマロン(エビのスープ)が、今ではすっかり我が家流に定着しています。

具が多くて、スープというよりも温野菜という感じです。野菜たっぷりのヘルシースープなので女性のランチにもおすすめです。

味を少し濃い目に作ると、ビールのお供にも絶品です。バーベキューやタコスの際に屋外でももってこいの一品です。

(材料)4~5人分

ズッキーニ 1本

ジャガイモ 2~3個

玉ねぎ 1個

キャベツ 3~4枚

干しエビ 出来れば有頭干しエビをカップ1/2程度

鷹の爪 3~4本

マギーブイヨン 3~4キューブ

レモンまたはライム適宜

(作り方)

あまりに簡単すぎて、作り方というのも大げさですが・・・

オリーブオイルを熱した鍋大きめににざく切りにした野菜を入れて軽く炒め、干しエビと輪切りにした鷹の爪を



5月号

加えたら、ひたひたくらいまでの水とマギーブイヨンを加えて煮込みます。
野菜が柔らかくなったら塩コショウで味を調べて出来上がりです。

わが家では大きなマグカップに盛ってレモン（ライム）を添えてサーブします。
辛いのが好きな方にはエクストラで鷹の爪を加えてあげてください。

* 干しエビを使うことでとても風味の良いスープが出来ます。中華材料として
売られている干しエビでも大丈夫ですが、できれば有頭の干しエビで作った方が
風味もこくもいいと思います。 わが家ではいつも岡山県の日生（ひなせ）名産の有頭干しエビを取り寄せてい
ます。

* 器はメキシコで買ったタラベラ焼きです。より美味しそうに見えませんか・・・？

by Mariko Nakamura

児嶋きよみさん寄稿

八バネ口通信 5月号 Office Com Junto(児嶋きよみ)

2013年3月2日 GlobalSession リポート

Guest Speaker : Alice Bonamy さん (フランス出身・京都府国際交流員)

Coordinator : 児嶋きよみ

場所 : 京都市東山いきいき市民活動センター

時間 : 10:30 12:00

参加者 : 高原幸子さん (ST) ・ 高原浩之さん (HT) ・ Mason さん (M) ・ 藤原翠子さん (SF) ・ 加瀬野美佳さん (MK) ・
小畠敬子さん (TK) ・ Alice さん (AB) ・ 児嶋 (KK) 8名

まず、Alice さんに全文を読んでもらい、内容をもう一度頭に思い浮かべることにしました。セッションでは、Alice
さんが日本に来てショックを受けたということから始まりました。

「男の人はサラリーを全部妻に渡して、その妻が家計をマネージメントをするんですって？フランスでは、それは、
絶対に不可能です。サラリーというのは、その個人の一生懸命仕事をした財産を意味していて、カップルが子ども
を持つことに同意したら、それぞれの

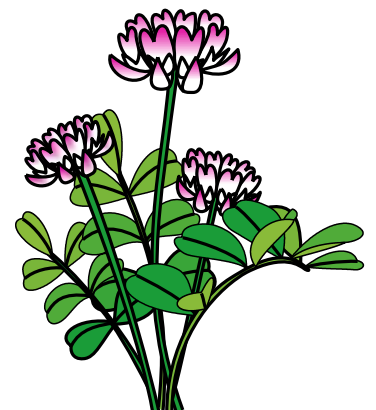
サラリーから必要経費を家族の共同口座に入れて使うのです。残りはそれぞれの
銀行口座に持ったままです」

MK : わたしの家でも、フランス式ですよ。

ST : それぞれの家次第でしょうね。

HT : フランス式では、女性が働いている間はいいけれど、やめ
ると大変ですね。日本は、女性がお金をコントロールしているの、ホテル
のレストランの昼食時など女の人ばかりですよ。全然男の人がいませんね。

M : それは、女の人が強いという意味ですか？



5月号

AB：では、日本でも男の人がお金のことは、自分でコントロールするといったらどうなりますか？ そうなると、働かないで家に居る女性は、力がなくなりますね。それは、男に依存しているということになりませんか？ フランスでは、"No work is No money"ですよ。

HT：主婦の仕事も大切ですよ。若い人でも最近では主婦を尊敬しているし、主婦をしたいという人も多くなっているのではないですか？ 働く女性の賃金も男性に比べて今も低いという統計がありますね。ハウスワークというのは、賃金が支払われなくても、同価値があるような仕事だと思いますね。日本人の男性は家事をしないので、妻がいなければ、まともに仕事ができない人もいますね。

別の視点でいうと、家が大切とっていて、男は外に仕事に行き、妻は家の仕事をするというように分担をしていたのです。欧米では、それぞれの自立が大切といいながら、でも、仕事は家族のためにするのであって、会社のためではないと言っているのですよね。

AB：でも、日本人の男は、実は仕事が一番で、ほとんど子どもがおきている間に帰ってこないですね。10:00とか、11:00になったら、家では寝るだけです。週末もつきあいで出かけたから子どもと接してなくて子どもが見えなくなっているの、子どもを結局甘やかしたりするような気がします。両方が働き、両方が子どもの面倒を見て、話したり、いっしょに遊んだりするのがいいですね。

M：もし、夫が家事もするならいいですが、同じように仕事をしていて、妻だけが家事をするなら、本当の意味での平等ではないですね。教育があれば、外で女性も働きたいのではないですか？

AB：女性も働き出すとお金も得るが、良いポジションも求め、得られれば、やる気も出て来ます。もし、女性だけが家事もするなら、子どもを持ちたいとは思わないでしょう。それで、少子化になると思います。

ST：家の仕事も大切と思う。わたしは、夫と一緒に仕事をしています。もし、家にいて家事をしたいのなら、それも大切なのでしたらよいと思うし、外で働きたいなら仕事をしたらよいと思います。最近の若い人は、家事もしたがるようです。

AB：専業主婦を自分から選ぶならいいが。

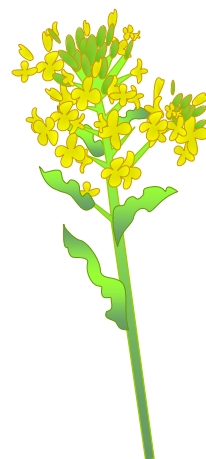
HT：今日のTopicsは、おもしろいですね。仕事をするなら、なぜするのかを考えることが大切であろうと思います。アメリカから帰国したばかりなので、なおそう思うのかもしれませんが、われわれ男の考え方が柔軟であることが大切であると思います。

AB：25才の男の友人が来て、「彼女が結婚したら、仕事をやめると言っているんだけど、どうしよう」と言われたことがあります、びっくりしました。

HT：私は、どちらの考え方もわかります。若いときの30代・40代は、仕事が一番と考えていました。50代になると、今は生活をよくしたいと考えるようになりました。自分の行き方も含めてですが。

AB：フランスでは、はじめから仕事を離れるなんてことは、若いときは考えないと思います。サービス残業で1時間くらい残ることはあっても、夜の8:00や10:00まで仕事をするのではないです。そんなことを要求されれば、そんな会社はやめると思います。最近では日本人も変化しているでしょう。

TK：私自身は、息子が5.6才のころから仕事を始めました。4人の子どもがいて、もっとお金が必要になり、国際サービス機関で仕事を始め、65才でリタイアをしました。その間、最後の5年間は園部に住みはじめ、義母の世話もあり、朝の5時に起き、6:30のバスに乗らなければバスがなく、帰りは真夜中という日が続きました。1900年代は、京都のホテルオークラに事務所があり、通訳ガイドをしていました。1~2週間家を空けるときは、すべて料理を準備して出かけました。口座も自分用があります。



5月号

TK: 10年以上園部にいると、女性は強いと思います。夫は強く見せているけれども、家では実際にはちがいます。女性は、野菜を売るなどして、自分の口座がなくても、秘密の収入があったりします。それに、外に出なくても農業は家でできるし、退職もないのです。私も最初の頃は、「京都の方が楽しいでしょう?」とよく聞かれ、「ここも楽しいですよ」と答えると、それ以上は聞かれなくなりました。昔は家事だけをしている主婦がうらやましかったです。夫は、今、家にいくらかお金がかかるかを知らないで息子にお金を送るとか言っていますが。でも、夫は私のお金をくれとは言いません。

KK: わたしは、今は、ひとりで働くのでは足りないし、片方に何かがあったときに、とてもあぶないと思うのです。収入も正社員でなければ低いはずですし。両方が働き、いっしょに、子育てをしなければと思いますよ。

HT: 昔は、日本は夫が働き、妻が家の仕事をするという形でみんなが Happy であったと思います。新聞などでも、フランスより日本の方が離婚率が低いはずですよ。

HT: 退職した後、妻は、夫が必要なくなるのではないのでしょうか? どちらが Happy かわからないですね。夫がリタイアしたあと、フランスではどうしているのですか? また、もし、女性が仕事を失うとどうしているのですか?

AB: 大学で勉強に戻ったり、訓練機関に行ったり、妊娠出産しても仕事を探します。

HT: フランスで女性が仕事を失うと、ストレスは日本の女性より大きいのではないですか?

AB: それは、normal だと思いますが。

HT: もし、私がフランスで妻であったら、ストレスフルだと思いますが。

AB: 全く働けなければそうかもしれませんね。

ST: 日本の女性は、そんなにストレスフルではないと思います。

AB: 家に一日中、子どもとだけいたら、とてもストレスがたまると思います。夫が遅く帰ってきて、「ビールは?」なんて言ったら、わたしは、クレイジーになってしまうと思います。福岡でホームステイしたときに、そこにご飯の炊飯器があるのに、夫は、妻に「おかわり」と言っていました。

HT: それは、悪い例では?

AB: 世代によってもちがいがあると思います。フランスでも、わたしの祖父母はそうだったかもしれません。

TK: わたしは、4人の子どもがいて、3人は男ですが、3人とも料理をします。下の息子は同居してるが、子どもをおぶって仕事もします。彼らはとても平等に見えます。

でも、働きながら子育てをするのは、いつの時代もとても大変です。学校もモンスターペアレンツなどがいて大変です。

AB: フランスにもあります。子どもも変わってきているようです。高校や中学校でも、子どもが先生を殴ったり、きたないことばを言ったりしても、先生は手を出せず、先生が子どもをたたくと、逮捕されます。

TK: だんだん変わってきているのですね。でも、子育ては両方の責任だと思います。

AB: 子どもの時は、顔はたたかれなかったけれども、おしりをつねられたちして、父はこわかったです。

TK: 出生率が日本が低いのは、いろいろな理由があると思います。若い女性は自分に自信がないのかもしれませんが。

MK: フランスは産後、育児休暇中に給料が100%だとさっき言われていたような気がします。本当ですか?

AB: フランスは法律で産後休暇のあと、育児休暇は11ヶ月と決まっていて、給料も保証され、あずかるところも待たずにあります。日本は法律ではなく、雇用主が決めるのであればと聞いて驚きました。

KK: 公的な機関などは、育児休暇は、3年とかあり、その間、産後休暇の終了後は、雇用保険などは、自分の支払いもありますが、50%はずっとあると思います。その期間保険証が持てるということです。育児期間は、自分で決めるはずですよ。でも、結婚を機会に退職したり、赤ちゃんができるので退職したりというケースはまだ多いと思いますよ。



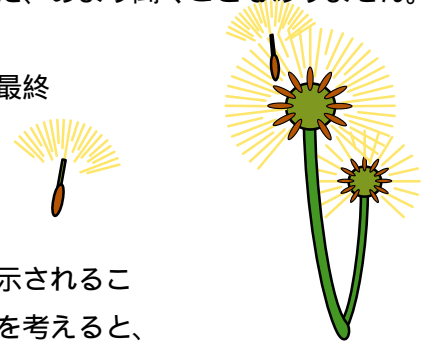
5月号

Aliceさんのテキストにある、結婚してもカップルの外出などを社会が応援するなどの記述には、あまりセッションでは触れる人がいませんでした。ベビーシッターなども日本ではまだ、あまり聞くこともありません。

以下の点については、いろいろなセッションがあったと思いますが、最終の結論には達していません。みなさんでお考え下さい。

テキストの一部の翻訳です。

「フランスでは、サービス残業や、遅くまで仕事のために残るよう指示されることも禁止されていて、違反すると訴えられるので、それにかかる費用を考えると、会社も気をつけている。フランスでは、母親や両親が働き続けるための支援体制が整っている。日本は仕事も家庭も同時に大切という考え方に変わりつつあるが、それでも、まだまだであると思うし、人々の考え方は、変えようと思わなければ変わらないと思います。男は、仕事をする人であるだけでなく、父親でもあり、女性の役割として、主婦であり、家事をする人という意識が変わらなければ変わらないと思います」



French parenting life

France often surprises the world because of its high birth rate: 2.01 points in 2011. Indeed, it is highest than the other European countries, and much higher than Japan with its poor 1.3 points. So why is it like that? Is it the direct consequence of French romance and good wine? It might be one reason, but I think the way we view couple life and pregnancy is the main reason behind this situation.

First, as you might already know, France is a country with many immigrants because of the colonies it used to have in Africa and in the Middle East. Therefore, it is a common sight to see Black and Arabian people in France, without anybody thinking of them as “foreigners”, which has a pejorative connotation in French. It is especially true when many black people were born in France or what is called “DOM-TOM”, French overseas departments, making them as French as I am. However, it is true that people who come from these ethnicities tend to have more children than white-French citizens, maybe due to their culture and lifestyles. Therefore, France’s open immigration policy contributes both to the birth rate and to increasing the work force in a country where an aging population increasingly puts pressure on the welfare system.

But more than immigration, I think this high fertility rate can be explained by the way French people view their couple and parenting life, and how this attitude is reflected in government policies.

First, even if gender equality is far from being accomplished, a lot of improvement has been made towards this goal. This can be observed in the attitude towards maternity and paternity leave. 84% of women between 25 and 49 years old are working, and women represent 48% of the working population. Maternity leave has existed in France since 1909, and lasts from 4 months to 11 months. During her leave, the new mother is guaranteed to receive 100% of her salary. I tried to ask my friends and did some researches about Japan’s case, but it seems that there is no law on this matter, and that both the length and benefits of maternity leave are left to companies’ discretion. I was really surprised to learn that, because for

5月号

me, it is really dangerous and can lead to a lot of pressure and human rights abuse.

Also, since 2002, men can also take a paternity leave of 14 days. Currently, 70% of French men take this paternity leave. French men are willing and are actively participating in their children's upbringing.

Secondly, almost all mothers are working. Not only because of the recent economic situation, where both partners have to work to make ends meet, but also because being a housewife in France is deemed useless, unproductive and lazy. Of course, if the woman is struggling with unemployment and has no choice, such a harsh judgment does not apply, but choosing to be a housewife is often badly viewed and very few women make this choice for they do not want to be entirely dependent on their husband.

Indeed, it was a shock for me to learn that in Japan, men give their salary to their wife and that she is the one managing it. In France, it would be completely impossible. Salary is deemed as one's hard-earned property. If couples decide to have children, they put the necessary amount of money from both their salaries into a joint account to use for the family, and the remaining into their own private bank

account. Therefore, if a woman chooses willingly to not work, she is completely dependent on her husband for her private spending, and would have no power on her own. With independence being an important value nurtured in children since young age, women do want to work.

Thirdly, becoming parents does not mean the end of couple life. When I started living in Japan, it was again a shock to find out about 2 things: that couples, once they become parents, call each other "dad" and "mom" and stop using their partner's name; and that they never spend time together as lovers: no more dates, romantic times or even... sex!

For French people, it is as important to keep being lovers as being parents. As a consequence, if love, affection or attraction as man and woman becomes inexistent in the couple, people often break up in the end if they cannot revive this relationship.

Therefore, once their infant becomes a child, almost all parents hire baby sitters from time to time to watch over their child while they are either working late, or when they want to go out as a couple. It is completely normal for parents of young children to go out to a restaurant, to the movies, or even on a short trip together, and ask a baby sitter, a nurse or their own parents to take care of their children while they are away.

There is also no waiting list to put one's child into nursery, as it is often the case in Japan. Nurseries can often keep children until late in the afternoon, giving time for the mother or the father to get off work and pick them up.

Lastly, life-work balance is really important for French people. I wouldn't say that there is no overtime or 残業 in France. We do overtime when there is a big project coming which requires more work than usual to meet the deadlines. However, overtime is limited to this kind of situation and never occurs



5月号

on a daily basis, unless both the company and the worker agree to it. サービス残業 or unpaid overtime, a sadly still widespread practice in Japan, would be impossible in France because it is illegal. If a welfare body or the worker denounces it, the company will be sued and can lose a lot of money and its reputation. Having to pay overtime no matter what, companies are often very careful to make their employees leave work on time so as not to spend more money.

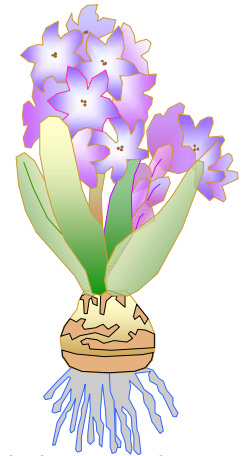
And without being said so, employees do leave on time. As a friend of mine put it, “ it seems that most Japanese live in order to work, but most French people work in order to live ”. Even if one loves his or her job, private life is just as or much more important than work, and French people treasure their time off with friends and family or at home. There is no need to mention that we take all our holidays, but companies in France also make sure workers take their time off in order not to pay compensation money for it.

In conclusion, I think France's legal and societal environment is really supportive for mothers and parents. In contrast to Japan, having a child does not mean having to choose between work or being a parent, between being a woman or being a mother: you can still be both, even if having a child changes one's life. Japanese society also started to change, with more and more women asking for gender equality and better working conditions to accommodate both work and family. But I think things will hardly change if people's mentalities do not change as well, which is to say: encouraging men to be a father and not only a worker and stop considering women's role as housewives and housekeepers.

このセッションの後、3月24日(日) 京都生涯教育研究所主催の「フランスの少子化社会からの脱却に学ぶ」というフォーラムが京都産業大学のむすびわざ館で開催されました。フランスからふたりの研究者をお招きし、フランスの事情が詳しく語られました。EUの加盟国の良い点は、法的手段を用いても、どの国もその基準に近づこうとしていることがあるそうです。

6月22日(土)には、関西フランス学院で、GlobalSessionを開催する予定です。たぶん日本語でやるはずですが。二条城の北側にある旧小学校跡の校舎を利用したフランス政府公認の学校です。是非、参加をして、どのような教育が京都でなされているかも、確かめてください。詳細は後日、お送りします。5月は、亀岡の予定です。

Office Com Junto 児嶋きよみ
〒621-815 亀岡市古世町1丁目2-41
tel : 0771 - 23 - 6579



5月号

「ハバネロメルマガ会員」ご参加お勧めください。

ハバネロに関心を持たれておられる方がお近くにおられましたら是非お誘いください。

申込みは簡単で、ホームページより申込みに必要事項をご記入頂き、事務局へお送りしていただけるだけで登録完了です。また、いつでも退会出来ますのでお気軽にお申込みください。

メルマガ会員の方には特典も考えております。

http://www.shinofarm.jp/habanero_tomonokai.htm

事務局

会員の皆様の宣伝コーナー開設いたします。

ご自分の会社やお店の宣伝・自己紹介など、案内したい内容がありましたら投稿してください。

行政関係の方もどんどん投稿してください。

ハバネロ以外でも全く問題ありませんので、会報誌を活用していただけたら幸いです。

原稿の締め切りは、毎月5日までお送りいただけましたら幸いです。

当月の10日頃をめどに、会報誌に掲載して配信致します。

原稿の送り先は、事務局(info@kyoto-habanero.com)宛にお願いいたします。

事務局

「ハバネロなんでも質問コーナー」開設中

事務局(info@kyoto-habanero.com)宛にご質問いただければ、直接ご質問者にお答えすると共に、承諾いただいた内容は直近の号でも紹介したいと思います。 匿名希望の方は「匿名希望」と伝えてください。

篠ファームからの情報



世界で一番辛いとされ、昨年ギネスブックに登録された、トリニダードスコピオンです。

辛さはハバネロ(レッドサビナ)の5倍 200~300万スコヴィルと言われております。

弊社も昨年から試験栽培しており、今年から生産段階に入ります。

これだけ辛いと、口の神経が麻痺してしまいますよね。

有限会社 篠ファーム

奈佐有子さんのメキシコのお話

一気に夏にむかっていますが、体が季節になかなか追いつかない今日この頃です。

さてさて夏と言えばメキシコ料理ですねえ！もちろんトルテージャやサルサは欠かせませんがもう一つメキシコ料理に欠かせない物・・・それは豆！！本当に毎日食べます。

スペイン語でフリホーレスと呼ばれ色々な種類の豆が売られています。豆はメキシコだけではなく中米やカリブ海南米の一部でもよく食べられています。キューバの黒豆ご飯やブラジルのフェジョアードなんかも有名ですね。

メキシコでは一般にご飯の付け合せ的な感じで食べられます。お店や家庭によって味も色々ありマッシュ状にしたものや豆のままのものまで形も様々。好みで選べます。

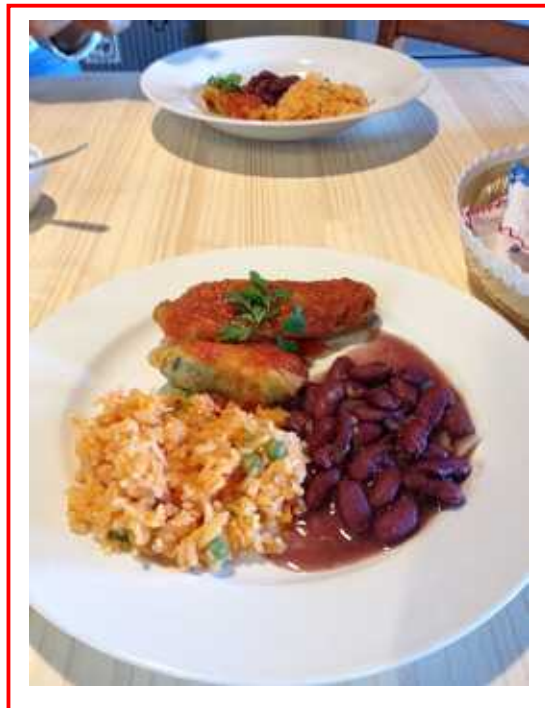
私が好きなのは黒豆（と言ってもキドニービーンズに近い）の煮込みです。

圧力鍋でじっくり煮たあと更に玉ねぎや唐辛子、ニンニク豚肉を入れて煮込みます。

作ったその日も美味しいのですが1日置くと味がなじんで又美味しい！（カレーみたいですね）これを焼きたてのトルテージャと食べると最高です。



左の写真はおぜんざいではありません・・・煮込んで2日目のフリホーレスです、後ろの料理はフリホーレスとチレセラノの炒り卵。朝食のメニューによく出てきます。



右の写真はある日のランチ。メキシコご飯とチレジェーノフリホーレス 定食屋さんメニュー！！

余談ですが・・・メキシコ人は餡子を苦手とする人が多い！お土産で和菓子を持っていても敬遠されます・・・彼らの常識の中では豆は塩辛く煮てあるもので甘いなんて想定外らしいのです！

日本人がオートミール(牛乳+穀物)が苦手なのと同じかもしれませんね～。